

出水のノリ

出水市立図書館指定管理者 (株) 図書館流通センター

総括責任者 田島 英樹 (図書館司書 (元) 出水市立図書館長)

八代海に北風が舞い、ツルの訪れの季節になりました。出水市立図書館では、季節や市井の動きに併せて『出水郷土誌』(平成十八年発行)、『高尾野町郷土誌』、『野田町郷土誌』等郷土資料からトピックで「図書館だより増刊号」として連載していくこととしました。『出水郷土誌』の編纂に携わった一人として、膨大な収載事項から現代を生きる人や未来を担う若人にお読みいただければ幸いです。ご期待ください。(原文)

出水でのノリ養殖は出水市発足前から行われている。旧米ノ津町の福ノ江海岸一帯は、遠浅で養殖期に当たる十月から三月の海水温度が低いことからノリ養殖の適地であった。旧米ノ津町役場が昭和二十五年(一九五〇)七月に発行した『町現勢一覧』にはノリ生産の記録はない。旧米ノ津町役場が昭和二十六年(一九五二)十月に発行した『町現勢一覧』に、「ほしのり七五万枚」とあり、初めてノリ生産の記録が見られる。同二十八年発行の『町現勢一覧』では「乾ノリ二一〇万枚」とあり、漁業として定着しつつあったことが分かる。また、昭和二十八年十月二十一日の新聞にも「米ノ津一帯では二十五年からノリの養殖事業がすすめられていて、昨年度の実績も六百万円(二百万枚)の生産をあげ、とくに種付け場としては日本一の折紙さえつけられているが、以下略」と記述されている。

昭和三十年前後のころ、鹿児島県内の沿岸漁業は衰微状態であった。その突破口として、浅草ノリ養殖が各地こそうるいで始められていた。浅草ノリは紅藻類で、その養殖方法は、「干潟に杭を建て、採苗(胞子を着生させる)した養殖網を水平に張って行う。時期は、十月から三月である。本市における創業時の様子は、『鹿児島大百科事典』によれば「明治二十四年(一八九一)、中出水村で農商務技師の指導により、有志共同で一五〇〇枚の生産をあげた」とある。

米ノ津町のノリ生産者は昭和二十八年、浅草ノリの養殖業を専門とする「米ノ津ノリ養殖漁協」を設立した。組合員は一二九人、出資金は一口一〇〇〇円で、漁場の適正な配分・作業の共同化・共同販売に力を入れ、五年後の生産量二〇〇〇万枚を目標とした。昭和三十年ころには、福ノ江海岸の浅草ノリ養殖は数少ない胞子付場となった。福岡県や熊本県、県内の養殖業者からの注文が殺到、約一〇〇〇平方メートル当たり、一万八〇〇〇円で応じた。

出水における浅草ノリの生産はこのようにして始まった。養殖は水温の影響はもちろん、病気や周囲の環境も大きく影響した。流入する河川水、沖合を航海する船舶の廃油に苦しめられた」ともった。また、ツル渡来地に混在するカモによる被害も発生した。昭和四十年代に入ると、県内生産量(県内の産地は出水のほか、川内・鹿児島・加治木・始良・垂水などであった)のうち約九割を占めるようになり、取引価格も一枚平均一五円を記録するようになった。浅草ノリの養殖作業は十月中旬、ツルの渡来とほぼ時を同じくして網ヒビの建てこみが始まる。養殖網は女竹ヒビから網ヒビに変わったが、厳冬・寒中で延々と続く家族総出の作業は不変である。収穫を終え、正月には乾燥の時期を迎える。乾燥方法も天日干しか機械乾燥に変わった。かつては、漁家の庭先で天日干しのノリが所狭しに立てかけてあったが、現在では見られなくなった。(『出水郷土誌』下巻 第9章 産業)



昭和30年代初めのノリ養殖(女竹ヒビ)



ノリの天日干し(昭和30年代初め)

ツル 「鶴見馬車」

約二六〇年にわたる徳川幕府が終わり、明治維新を迎えた。幕府が定めたおきてツル捕獲禁止の掟は自然消滅し、次第にツルは狩猟の対象となり、各地でその生息場所が狭められていった。北海道には特に多くのツルが生息していた。しかし、維新後は銃殺したツルの肉を塩漬けにして、どんどん東京方面へ送ったため、ここでもまたその姿をほとんど失った。また、ツルとともにトキやコウノトリなどの大型で目立つ鳥も、絶滅の危機に追いやられていった。

出水平野にも他県から猟師が入りツルを乱獲し、明治の中ごろには一羽も来なくなつた時期もあったといわれている。明治二十八年になってようやく狩猟法が制定され、再び渡来数は徐々に増加する。

また、「狩猟法」により、大正五年（一九一六）に阿久根地区、同十年には、荒崎、莊地区と次々に禁猟区が広げられた。このころ、荒崎田んぼは湿田で、水稲も現在の面積の三分の一程度しか作付けできず、裏作はほとんどできない状況だった。しかしこのことは、ツルの越冬地となる恰好の条件になつた。

大正から昭和の初め、荒崎にツルが訪れるころになると、野田や米ノ津のひなびた駅に汽車が着くたびに、これまた相応しい客馬車が「鶴見」の客を待っていた。

荒崎には、これら遠方からわざわざツルを見に訪れた客のために、鶴見亭が建つた。そして、温かいうどんや、ツルにちなんだ土産物が飛ぶように売れた。土地の人たちはツルに餌を与え、また、傷つき、病に倒れた不運なツルの供養に「鶴の墓」を建てて冥福を祈つたのである。

『出水郷土誌』下巻 特別編 ツル



昭和8年頃のツルと松並木（写真提供：前田保雄）

中央図書館 電話0996-63-2105
高尾野図書館 電話0996-82-5452
野田図書館 電話0996-84-3100

今月の休館日は19日(定期)
" 16日(定期)
" 16日(定期)

12/8(土) バリアフリー映画会
(中央図書館)

メールアドレス izumilibrary@iaa.itkeeper.ne.jp

<https://www.izumi-library.com>